
文化祭前夜の労働について

石定 ン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文化祭前夜の労働について

【Nコード】

N1442BA

【作者名】

石定　　ン

【あらすじ】

どうも、お久しぶりです。石定　ンです。

お久しぶりといっても名前を覚えていない方もいらっしゃると思うので一応言っと、いかりんかつ篠宮です。神様はいないとかを連載していたのですが、事情により石定　ンとして活動しております。ところでこの小説は年内に短編を三つ投稿するという目標で執筆しました。

でもこの長さだと短編じゃないだろうという感じがします。

僕は文化祭なんてリア充のためにあると思っています。早くリア充

になりたい。

文化祭。それは学園生活上において体育祭と並ぶ大イベントであり、青春において最も重要なイベントである。

文化祭。それは恋人たちが肩を並べて歩く忌まわしき大イベントであり、独り身において最も憎むべきイベントである、

文化祭。それは文化系クラブ達の発表の場であり、体育系クラブはただ退屈なだけのイベントである。

文化祭。それは模擬店などを出し合って、学園生活を謳歌するとても面白いイベントであるらしい。

——それだと言うのに僕は文化祭前夜、暇そうに独り小説を読んでいた。

周りのクラスメイト達は忙しそうに資材を運んだり、暗幕を張ったり、イラストを描いていたりした。クラスメイト達はそれを楽しそうにするのであるのだから不思議であった。

僕は労働という行為が苦手だ。働くという行動が馬鹿馬鹿しいと感じる。そう考えるようになったのは母が過労で倒れたとき。およそ五年ほど前のことだったと思う。

そのときから僕は労働という行為を嫌悪し、なぜ母にそこまでして働くのかと問い詰めた。

母はこう答えた。

「お前を養うためだよ」

僕は正直呆れた。6畳一間の部屋でも僕は満足するし、食事も貧相でいい。パソコンも買い換えなくていい。

母は父親がなくなってからより一層労働にいそしむようになっていき、結局2LDKのマンションに、食事も肉魚野菜をすべて取り入れ、パソコンも最新のを買ってくれた。

母親も今はそれなりの地位に出世したため、かつてのような激しい労働行為はしていないのだが、あの時から僕は労働という行為、

はてはこの世の社会までを嫌悪するようになった。それでも僕は働くだろうし、そうしなければお金を稼ぐことはできない。

だが社会に絶望したという論理の飛躍に気づかないまま高校に入学して、もう半年がたっていた。

僕もこの考えはおかしいと感じるのに、いかんせん子供のころに根付いた価値観を取り払うことは難しく、それすらも面倒と感じ、中学時代を怠惰にすごし、高校もそうするつもりであった。

だが文化祭の準備で、どのような仕事をするかの割り振りが執り行われ、僕は仕方なしに一番楽だと思うところに立候補した。

サウンド係である。

ネットからフリー素材の音楽を持って来ればよいし、幸いにもクラスメイト達はなぜかは知らない人が多いところやキツイ仕事を選んでいたようだったので、幸いにも僕はサウンド係という仕事に決定した。それに僕は音楽は多少たしなむ程度に聞いているため、この仕事が一番相性が良いのではないかと思ったのだ。

実はサウンド係は二人であり、僕ともう一人、相嶋さんという女子が担当することになった。

相嶋さんはサウンド係などといういわばモヤシのためだけにあるような仕事とは真逆にいるような人であった。彼女は体育祭で大活躍した、陸上部員だったのだ。

それから僕と相嶋さんの全く持って退屈な日々が始まった。

なにせ仕事が『怖そうな』という曖昧な定義での音楽収集、それも五曲ほどだったので、仕事はすぐに終わると思っていた。

実際そうであったし、仕事は一日で片付いたので、僕は相嶋さんに何気ない質問をかけてみた。

「なんで相嶋さんがこんな仕事を？ 相嶋さんはもっと肉体労働に行くと思ったんだけど」

相嶋さんはこう答えた。

「だって音楽が好きだから。羽生君は違うの？」

相嶋さんはこう即答した。因みに羽生とは僕の名前である。

「いや、僕は大きく働かなくて済むかな、と思っただけ」

相嶋さんは目を丸くした。だがすぐに相嶋さんらしい笑顔に戻すと、ふとこう漏らした。

「でも男女二人で作業ってなんか青春っぽいなあ」

確かに考えてみるとこの展開はライトノベルではよくある展開だ。だが僕はその件に関しては何も言わず、

「そろそろ帰る」

といって、教室を退散した。

それから僕は相嶋さんと多少会話量が増えて、共通の音楽趣味について語り合ったりもしたが、結局のところ僕たちの仕事は終わっている。僕は放課後になると、足早に家に帰っていた。相嶋さんは結局力仕事を手伝っており、重宝されているようであった。

だが昨日の放課後、学級委員が突然このような発言をする。

「明日は、文化祭前の最後の日なので、みんな泊まりで仕事をしよう！」

僕はそんなのはただ煩わしいだけであり、時間の浪費なのだが、全員参加らしいので仕方なしに小説でも読みながらすごそうと思っていた。

僕の学校は大変珍しいシステムで、金曜日が文化祭前の最後の日であり、土曜日ははさんで日曜日に文化祭らしい。それまでは普通に土曜日に開催していたらしいが、学校に泊り込むクラスが増え、仕方なく日曜日開催にしたらしい。

そうして今に至るわけであるが、僕の仕事は終了しているので、予定通り教室の隅でずっと小説を読んでいた。

が、すでに何十回も読んだ小説もクライマックスに差し掛かったあたりで、相嶋さんが声をかけてきた。

「羽生君も一緒に作業しようよ！」

僕にとっては面倒なだけの肉体労働に誘うとは、ここは無視を決め込む。

だが相嶋さんはそう甘くはなかった。突然僕の小説を取り上げる

と、

「こんな未来の小説読んでないで、さあ一緒に！早く！」

2001年は過去だと突っ込む前に彼女は僕の手をとり、かなりの早足でみんなの所へ戻っていく。

そのまま僕は巨大なダンボール箱を持たされ、強制的に肉体労働に参加し、そのまま夜の八時までに参加していた。

だけど、彼女の天真爛漫な笑顔を見ると、たまにはこういうものもいいかも知れないという気持ちが出てくるのだから不思議だった。

(後書き)

それではまたどこかで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1442ba/>

文化祭前夜の労働について

2012年1月3日17時54分発行